

■ 特集／他者問題研究事始 ■

他者の社会理論序説

荻野昌弘

(関西学院大学先端社会研究所所長)

■ 要 旨 ■ 本論は、「住まう」という実践が、境界を設定する行為であり、その過程で「他者」が創出される点を示している。このような他者概念を社会学理論の中枢に据えることによって、新たな社会学の構想の一端を提示するのが、本論の目的である。

■ キーワード ■ 他者、境界、両義性、戦争、植民地

1 境界内存在と境界外存在

人間は、ある特定の対象を固定化することによって認識する。目の前にあるコップは、コップと
いうかたちを持った物体として捉えられる。コップはさまざまなかたちで利用されるが、コップと
いう定型がひとたび認識されると、その認識が揺らぐ可能性はほとんどない。仮に、コップがガラ
ス製で割れても、コップ自体がかたちを有していることに対する疑問を挟むことにはならない。

これはコップのような単一の物体に限らない。複数の物体が連鎖している場合にも、認識の対
象を固定する必要がある。ただし、この場合、コップのように単体として認識されるよりも、認識す
る主体の選択の幅が広がる。連なる物体のどこまでを視野に入れるかという判断は主体に任されて
いるからである。もうひとつ重要なのは、認識対象を構成する要素が多くなればなるほど、対象そ
のもののイメージを確定することが難しくなるという点である。

認識可能な範囲の限定は、このような複数の物体の連鎖を把握するときに生じる困難を克服する
方法のひとつである。その際に、まず用いられるのが、空間的認識である。ある特定の空間的部分
だけを認識の対象とすることによって、認識対象が措定される。その結果、認識対象とそれ以外の
部分が区別される。対象部分と対象外のあいだに境界が引かれるのである。

住む、あるいは「住まう」という生活の根幹に関わる行為も、境界を設定することから始まる。
住まいの確保とは、住まう場所を確定することであり、場所の内と外の境界を定めることである。
それは、通常、日常生活のなかで、実践的に行われ、生活の場所が固定されているとき、それは主
体に安定感を与える。また、境界設定の結果、境界内に位置する存在に対する認識と、境界外に位
置する存在に対する認識は異なるようになる。そこで、境界の外部に位置する存在を、本論では
「境界外存在」と呼ぶことにする。これに対して、境界内に位置する存在は、「境界内存在」である。

境界内存在の位置から境界外存在がいかに認識されるかについては、いくつかの方向性がある¹⁾。
第一の方向性は、境界外存在に関心の埒外におこうとするものである。日常生活において、住まう

場所である境界内への関心に比べて、境界外への関心は乏しい。

第二の方向性では、第一の方向性とは反対に、境界外存在に関心が向けられ、何らかのイメージが境界外存在に付与される。境界外存在の表象の方法にはいくつかのタイプがある。まず、境界外存在を敵対者として表象することがある。敵対者を表象しなければならない状況として、少なくともふたつの場合がある。ひとつは、対立が不可避的なので、敵として認識せざるをえない場合である。本来は、関わりたくないのだが、所有権に関する問題など何らかの理由で境界外存在と接触しなければならない場合などがこれに相当する。この場合は、境界内存在に関心の域外に置こうとする場合と、それほど変わりがない。境界外存在との関わりを最低限にとどめておきたい点では、境界外を無視することと変わりがないからである。これに対して、敵との対立がなかば恒常的となり、敵の存在自体が境界維持のために欠かせなくなる場合がある。この場合には、敵は遠ざけておきたい存在ではなく、より積極的な意味を持つようになる。

もうひとつのタイプは、境界外存在をただの敵対者として捉えるのではなく、より積極的な意味で表象する。境界外存在が憧憬の対象となることもあれば、より劣った存在として認識される場合もある。なかには、境界外存在に関するかなり緻密な知識が創出されることもある。

境界外存在に対する認識には、意図的な無視、排除のようにこれを否定的に捉える方向と、否定的であるか肯定的であるかはともかく積極的に表象しようとする方向のふたつがあり、通常はこのふたつが重なりあって、認識のありかたを決定する。

2 他者概念の認識論的転換

住まうという行為が、境界の設定を前提にしている以上、境界の設定によっていかに境界内存在と境界外存在が確定されるかについて解明することは、人間の生存（そして人間以外の動物においても）のありかたを知るうえできわめて重要な意味をもっているはずである。特に人間集団に関する知である社会学において、それは中心的な課題であるはずである。

しかし、社会学は、主に境界内部の集合だけを「社会」として捉え、境界内集合とその要素を対象とする方向に収斂してきた²⁾。仮に、異なる集合を比較することがあっても、個々の集合は、閉

- 1) 住むとは、ある特定の場所を選択する営みである。しかも、それは、一時的な滞在とは異なり、ある一定期間、同一の場所に定着している必要がある。みずからの住処を築く行為は、住処という認識対象の内部にみずからを置く過程である。本論では、議論をこのような境界内存在の側に立って進める。社会科学において、多くの場合認識主体と認識対象は分離していることが前提とされている。つまり、認識主体は、認識の対象として選択された範囲の外に位置するものとして捉えられる。しかし、認識者と認識対象との関係は、本来二つの選択肢がある。それは、認識者が認識対象の内部に位置する場合と外部に位置する場合のふたつである。自然科学では、観測者の位置が観測対象の内部に位置するのか、それとも外部に位置するのかによって、測定データに変化があることは了解されている事項である。また、日常的な認識の次元においても、認識主体が認識対象の内部に存在する場合がある。いや、むしろそのような場合の方が多い。
- 2) フランスにおける社会学の発想の源流のひとつとして挙げられる19世紀初頭の反動派（反革命派）ポナルドやド・メストルの思想では、社会を統一体として捉える観点を提示されている。彼らにとって社会は聖性を帯びており、死者と生者との調和によって成立している。死者たちの生きていた過去が現在にも絶対的な影響を及ぼしている以上、反動派にとって、伝統の遵守は不可欠である。現在のフランス社会学史研究においては、これらの反動派がフランス社会学の事実上の「創設者」であるという見解は合意を見ている（Namer 1994: 302）。つまり、社会学の創成期に、すでに境界内の集合だけを社会とし

じた集合として捉えられてきた。

社会学における集合の構成要素の概念化には、いくつかのタイプがあるが、一個人をひとつの単位とするのが、もっとも一般的である。集合の要素である自己 A は他の自己 B、C...X とともにある集合の構成要素となる。A にとって、B、C...X は、他者として定義され、自己と他者のあいだの相互作用やコミュニケーションが論じられる。社会学で用いられる「家族」「町内」あるいはより抽象的な「社会」のような概念は、すべてこうした集合の内部に位置する境界内存在のみを射程に入れている。

このように、自己と他者を区別するのは、個人主義的な（もしくは近代的）哲学の反映である。たしかに、社会学では、自己を中心として、自己と他者を含む集合を捉えるのではなく、他者の存在を媒介として自己が存在すると考える³⁾。しかし、このような発想の転換は、集合とその要素としての自己という認識を変化させるには至らない。境界内存在だけが対象となっているからである。

少数ではあるが、境界外存在を考慮に入れた社会学理論も存在する。それは、敵対者を作り、敵と対立することが、社会秩序の形成につながるという理論である。たとえば、ジンメルは、コンフリクトに関する論文のなかで、長期にわたって続いたアイルランドの抗争が、一頭の牛の色をめぐる対立だったという例をあげ、ほんのささいな諍いが、大きな紛争に発展してしまうことがある点を指摘している (Simmel 1999: 278)。ジンメルによれば、それは、人間には本来的に闘争本能が備わっているからである。

しかし、前節で指摘したように、境界外存在を単なる敵対者としてではなく、より積極的に意味付けし、境界外存在に関する知識を蓄積しようとする方向性も存在する。こうした境界外存在に関するイメージと知識は、人類学のように、対象を境界外存在に特化した領域で構成されてきた。これに対して、社会学は、境界内存在の集合だけに関心を払い、集合内の秩序維持に実は深く関わっている境界外存在を考慮の外に置いてきた⁴⁾。境界内存在と境界外存在は、学術的次元で厳密に区別され、それぞれを個別に扱う専門領域が、しだいに構築されていったのである。

境界の設定が行われ、境界内と境界外が異なる知の体系として成立する。これは、近代において自己に固執する個人主義が発達する一方で、境界外存在の表象への欲望も開発されていくことを示している。この意味で、境界内存在への関心だけではなく、境界外存在に対しても関心が及び、このふたつの関心が交差することによって成立しているのが近代なのである。そして、ここに、ふたつの他者概念が立ち現れる。ひとつは、境界内存在の集合において、自己との関係において定義される他者である。もうひとつは、境界が設定され、境界の向こう側にいると見なされた存在を他者とする認識である。

こうした二重の他者概念が、西欧に独自に成立した知の体系であることを総体的に分析した研究は皆無に等しい。なぜなら、自己との関係において成立する他者概念を生み出す個人主義に関しての考察と、境界外存在を他者とする知に対するそれとが、常に別個に成されるからである。前者に関しては、人類学者のルイ・デュモンの分析などがある。デュモンは、最小単位としての個人のほ

て捉える傾向が見られたのである。

3) デュルケームは、人間は二重性を帯びており、個人的な存在であると同時に、社会的存在であるといい、個人のなかに「知的、道徳的秩序」すなわち「社会」を見ることができるといふ (Durkheim 1985: 23)。

4) 例外的にジンメルの「よそのもの」論などがある。

かに、17世紀から、西欧では、「社会から独立した存在」としての個人という新たな個人概念が発達し、それが個人主義の起源になっているという⁵⁾。デュモンによれば、個人主義は「イデオロギー」なのである。

後者を代表するのは、エドワード・サイードによるオリエント地域に関する知、「オリエンタリズム」の創出過程に関する分析である (Said 1978)。それは、イギリスとフランスの知識人が生み出したものであり、西欧とオリエントの差異を捉えるだけではなく、西欧の優位を前提としている。サイードによれば、西欧は、敵ではなく、あらかじめ劣った存在、抵抗しても勝利しえない存在として、オリエントを表象している。

サイードは、他者を生身の身体を持った存在というよりは、イメージされた存在として捉えている。境界の設定そのものが恣意的であり、その結果、表象された境界外存在自体が、認識主体の中心的な問題関心にもみ基づいているという主張は、その後人類学内部でも起る内在的批判を先取りしている。ただ他者を境界内の集合で捉えるのではなく、境界外存在こそ他者であるとする他者概念を提示している点では、その主張は、人類学における伝統的な対象との措定と変わりはない。

境界内存在において他者を定義する社会学の他者概念も、境界外存在に他者性を見る人類学の他者概念も、他者概念の成立が境界設定そのものの意義に配慮せず、境界が固定されたものである点を前提として構成されている。社会学のように、そもそも境界内存在だけを対象としている場合、境界設定それ自体は、ほとんど無視されている。また、境界外存在を対象とする場合、境界そのものの存在を無視するわけにはいかないが、境界が恒常的なものであると見なす傾向があり、やはりすでに設定された境界を暗黙の前提として、他者が捉えられる。

しかし、重要なのは、すでに境界が引かれたあと、境界外に位置する存在とのあいだにある差異ではなく、境界が新たに設定されるまさにそのときに、他者が創出されるという事実である。他者とは、境界によって外部に遠ざけられるだけの存在ではなく、新たな境界が設定されることによって、視界に入ってくる両義的存在なのである。ただ、これだけでは、新たな境界設定の際に他者が立ち上がる点を強調している以外、人類学でなされてきた定義と何ら変わるところはない。

真の注目点は、二点ある。第一に、境界外存在の表象によって、境界外存在は、単なる差異、排除の対象ではなく、同時にどこかに親和的な部分を持ち、場合によっては、親近感や畏敬の念さえ感じられる存在となる。もちろん、それは純粋な親近感であるとは限らない。そこに、支配可能な空間を拡大しようとする意志が伏在している場合もある。表象された存在は、やさしく包まれながら支配される、包含＝支配の対象ともなりうるのである。

第二に、実はある境界が設定される時、もうひとつの境界が引かれている点である。それは、表象された境界外存在と、いまだ表象されていない境界外存在、潜在的に表象可能性がある境界外存在とのあいだに引かれた第二の境界である。このもうひとつの境界の外部には、境界内存在の関心の埒外であるか、関心はあってもいまだその表象に十分な知的エネルギーが、費やされていないような領域が存在する。したがって、境界の設定とは、常に二重の境界を設定することにはかならない。他者とは、ひとつめの境界 L1 ともうひとつの境界 L2 のあいだに位置する存在なのである。

5) 個人主義の誕生に関しては、(荻野 2005) にすでに詳しく論じているので、ここでは簡単に記述するにとどめる。

3 境界の二重性

境界の二重性は、あらゆるタイプの境界設定に内在している。たとえば、村落共同体における村境の設定に、境界の二重性という特徴は表われている。村境の外部には「他界」が存在し、祖先の霊がそこに棲むと考えられている。この意味で、祖先の霊は象徴的な他者である。ただ、村人にとって他界は、死後埋葬される場所であり、決して無縁な場所ではない。いずれは、みずからが向かうべき場所であり、村人たちは、他界に存在すると見なされている祖先の霊と定期的に象徴交換を行う⁶⁾。また、村境の外にある山なども境界外の空間でありながら重要な意味を持つ。なぜなら、そこには山の神や主が住むと考えられているからである。

村境の外部は、完全に関心外の世界ではない。たしかに、容易に足を踏み入れてはならない危険に満ちた空間であり、他界が象徴されている畏怖心を喚起する場所である。ただその一方で、それは、村人の生活を大きく左右すると考えられている。

このように、村境の外部にありながら、象徴的意味を帯びる空間の先には、そうでないいわば関心の対象外である空間が広がる。実は、ここにもうひとつの境界 (L2) が引かれているのである。ただし、それは村人たちにとっては、ほとんど存在しない、無に等しい空間である。村人が信仰する他界のような境界外空間以外に、未知の世界が広がっていることは、公的には認識されない。たとえば、村から失踪した者は、村人が預かり知らぬ世界に去った、あるいは何者かによって連れ去られたのかもしれないが、そうではなく、「神隠し」にあったと認識される。したがって、失踪者の搜索は、象徴的な他界でもある山で、儀礼的な手続きを踏んで行われる。失踪を認識する際に、不可視である第二の境界の向こう側にある未知の世界を想像することは許されない。

境界外存在を敵対者として措定する場合も、同様の論理が働いている。敵は脅威であり、敵の攻撃に対して防御の必要性がある。また、機会があれば、敵を制圧しようとする。敵対関係がなれば恒常的になると、敵との対立において、境界内の秩序が維持されるようになり、敵の存在は欠かせないものとなっていく。この段階では、敵と味方陣営 (境界内存在) は、敵対すると同時に相補的な関係を築いている。味方と敵の双方は、お互いのあいだにある境界の防衛を強化することで、ある意味ではひとつの集合となり、その外部とのあいだにもうひとつの潜在的な第二の境界を引くことになる。

先祖の霊や敵対者とのあいだの境界設定は、第二の境界の向こう側にある世界を排除する傾向にある。肯定的な意味であるか、否定的な意味であるかはともかく、ある特定の他者を特権視することによって、それ以外の無の世界あるいは「不特定多数」を排除するのである。

境界内存在から成る集合 (これを単に集団と呼んでもかまわない) は、みずからの存続のために、ふたつの境界のあいだに位置する他者を活用する。失踪や出奔を神隠しとかたちで理解するのも、他者として神を活用しているのである。神や祖先の霊は、こうして境界内集合にとって重要な、ときには決定的な意味を持つ。ただ、それは、あくまで象徴的な効果に過ぎない。境界外存在を敵対者として認識する場合にも、境界外存在をできるだけ斥けておきたいからこそ、敵対者に仕立て

6) この象徴交換は、祖先の霊をさまざまなかたちで、喚起することによって行われる。これを「追憶の秩序」と筆者は呼んでいる。この点に関しては、(荻野 1998) を参照のこと。

上げるのである。つまり、象徴的他者や、敵対的他者は、境界内集合を拡大するのではなく、原則として、境界外存在をできるかぎり排除するために構成された他者像なのである⁷⁾。

4 近代における境界

これに対して、他者の存在をより積極的に活用する場合がある。近代の特質が、この点にあることは、2節で指摘した通りである。この特質は、国民国家における境界外存在の扱いに典型的に表れている。あるいは、国民国家が形成されることによって、他者の積極的活用が肯定されるようになるといってもいい。

ヨーロッパでは、19世紀から英仏主導で、数ある境界のなかでも絶対的な意味を持つ国境が人工的に設定されていった。その結果、境界外存在に対するイメージが醸成されただけでなく、そのイメージに基づいて、国境内部の秩序が形作られ、境界外の空間に帰属する存在は、「外国人」として明確に認識されることになった。ヨーロッパ内部（特に西欧）では、原則として対等な国民国家が成立するが、そこに、新たに境界を確定しようとする闘争が始まる。国民国家は、それぞれ境界の移動によるみずからの領土拡大を志向するので、国民全体を動員する国家間の戦争が起こる。

西欧諸国の領土拡大のための攻撃対象は、西欧内部にとどまらない。領土拡大の欲望は、ヨーロッパ外部にも注がれる。オリエントの表象のように、境界外存在に関する表象、すなわち他者像の構成は、単なる趣味的な文学的あるいは美学的産物ではなく、植民地の形成と密接に関係するようになる。植民地は、それまで境界が設定されていなかった場所に、場合によっては、暴力も行使しながら、境界を設定することである。ただ、それは、異質な存在の住む地域への単なる侵略ではなく、知識を通じた、世界を構成する一要素となった他者に対する権力関係の構築なのである。

また、植民地の形成は、植民地と宗主国とのあいだに支配関係に基づく境界を引くと同時に、宗主国と植民地以外の地域との間に明確に第二の境界を引く。西欧内部の国民国家ではなく、その植民地でもない、第三の地域も明確に認識されるようになる。それは、いずれ植民地や宗主国の勢力圏内に取り込まれるか、そうでなければ敵対する可能性がある境界外地域である。第二の境界が可視化されることで、それまでは縁のなかった世界が、支配可能性のある地域として明確に意識されるのである。

ここで、第一の境界と第二の境界のいずれに着目するかによって、誰が他者なのかという他者認識にも変化が生じる。第一の境界が注視される場合、植民地と第三の地域は、宗主国にとって、いずれも他者である。また、第二の境界が特権視される場合には、宗主国と植民地とは、同一の集合に帰属するとみなされる。宗主国にとって、植民地は、あるときには、境界内に包含され、あるときには境界外に排除される存在となるのである。

このように、第一の境界と第二の境界のふたつの境界が使い分けられることによって生まれる両義的存在こそ、特に他者性を担った存在である。植民地は、この意味で、典型的な他者である。植民地あるいは支配される側にとっても、支配者は他者であり、闖入者でもある。ただし、境界設定

7) 勃興期の宗教集団のように、神のような象徴的他者を用いて、その境界を広げる場合もある。

の主体は宗主国であり、植民地は宗主国が設定した境界には元来何ら関心はなかったはずであるし、またそれを積極的に認めてもいなかったはずである。植民地化のあとも、宗主国による境界設定を完全に容認したわけではなく、必ずしも世界を宗主国の引いた境界に基づいて認識しているわけでもない。

第一次世界大戦は、以上のような国民国家という新たな境界設定の方法が浸透した結果生じる問題をすべて孕んでいる。

第一次世界大戦は、国境をめぐる国民国家間の戦争である。それは、境界をめぐる闘いであり、お互いが塹壕のなかから相手をにらみ、対峙しながら、攻撃を繰り返す状況が継続する戦闘形態にも、その特徴がよく表われている。

また、戦争によって大きく変化するのは、直接戦闘に関わる軍隊や戦場となった地域だけではない。国民国家間の戦争では、戦闘が行われる一方で、戦地以外の状況にも大きな変化が訪れる。それは、第一次世界大戦期に、慢性的労働力不足から周辺諸国ではなく、東欧や、アフリカ、アジアからの移民も増加した点に如実に表われている。歴史学者のイブ・プルシェは、この経緯について、次のように記述している。

外見と服装のちがいがから、アフリカ人、中国人、アラブ人はすぐにわかり、ひとびとは、それに驚き、不安を抱いた。フランスは、その領土にさまざまな人種を見出したのである。閉鎖的な世界、他者を閉ざした国（フランスのことを指す 筆者注）は、これらの見知らぬ集団を、はじめは好奇心を持って、それから極度に恐れながら眺めた（Pourcher 1994: 278）。

プルシェは、「戦争は、かつてなかったほどの想像を絶する大規模な人種の交わりをもたらした」という。

フランス革命を経たフランスは、出生率が低下し、不足した労働力を供給するため、19世紀なかばには、周辺諸国から積極的に移民を受入れ始める。周辺のイタリア、スペイン、ベルギー、スイスなどから労働者として移住する者が増加する（Armengaud 1965）。境界外存在は、排除の対象ではなく、必要があれば、労働力として活用されるようになったのである。

こうした傾向に拍車をかけると同時に、国民国家という境界設定が潜在的に持っている二重の境界の動員力が、最大限に発揮されるのが、世界大戦なのである。フランスは、戦時中の労働力不足から、植民地（アルジェリアは、法的には、植民地ではなく、フランス領土という扱いではあるが）から、兵力だけではなく、労働力も調達する。また、「東欧」のように、直接植民地ではない地域もより積極的な意味を持つようになり、第一次世界大戦のあいだには、フランスの隣国で対戦国であるドイツより東に位置する地域（第二の境界の外部）にはとどまらず、労働者の重要な供給源としての役割を果たすようになる。第二の境界の向こう側は、もはや無に等しい世界ではない。二重の境界が、意図的、戦略的に動員されているのである。第二の境界を可視化するとはこのことである。

戦争状態では、いうまでもなく敵こそ最大の関心の対象である。したがって、近代以前の戦争であれば、敵以外の境界外存在は関心の埒外に消え去ってしまうはずである。潜在的境界の外部は、視野の外におかれるはずなのである。しかし、近代戦においては、潜在的境界の外部にも関心が向

かっている。ふたつの境界のうち、第一の境界だけではなく、第二の境界も不可視の状態から積極的に可視化される。

第二次世界大戦も同様に、国民国家間の境界をめぐる戦争であったが、その後、戦闘は別のかたちで展開する。戦後、二大勢力となったアメリカとソ連は、直接戦争を行うのではなく、いわば場外乱闘のように、米ソのいずれにも支配されていない地域を支配下に置こうとすることで、常に米ソ以外の地域で紛争を起こすようになるのである。冷戦期の二極構造は、米ソ間では排他的で敵対関係を築いている。それは、両者のあいだで充足した対立関係ではなく、第二の境界の外側をいかに支配するかが、ふたつの巨大勢力の最大の関心事となる。第二の境界の外側が、ますます重要な意味を持つようになるのである。

現在においても、先進資本主義国家が外国人労働者として雇用するのは、旧植民地や、戦争などを通じて一時的にせよ支配した地域などである場合が多い。これは、かつての境界設定が、依然として有効であることを示している。境界の設定は、絶対的なものではない。なぜなら、境界が、状況に応じて変化するからである。境界内の範囲の拡大と縮小は境界の位置を変化させる。絶対に見えるような国境でさえ、戦争やさまざまな紛争、政治的決着によって、変化していく。これは、第二次世界大戦前の世界地図と戦後のそれとを比べれば、歴然としている。しかし、境界が変化することによって、完全にかつての境界が消滅するわけではない。それは、残存し続ける。そして、それが、労働力を確保する際に活性化されるのである。

企業は、労働力が必要な場合には、積極的に外国人を境界内に取り込んでいく。しかし、景気が悪化すると、外国人労働者は解雇されてしまう。このように、外国人が他者として活用される状況を可能にしているのは、二重の境界の存在である。国境（第一の境界）とは別に第二の境界が暗に引かれており、ふたつの境界の狭間にある他者が、労働者として雇用の対象となるのである。

このような二重の境界を用いた雇用の論理は、外国人の場合に明らかであるが、いうまでもなく、この論理が適用されるのは、外国人労働者に限ったことではない。たとえば、企業組織における正規雇用と非正規雇用の区別がこれに相当する。この場合、少なくとも二重の境界が引かれている。ひとつは、正規雇用と非正規雇用とのあいだの境界、そしてもうひとつは、企業の内と外のあいだの境界である。企業の経営が悪化したときに、企業は、まず非正規雇用の労働者を「排除」すなわち解雇する。近代社会自体が、二重の境界を作動させることによって、成り立っているともいえるのである。

5 境界の問題と社会学

前節までで明らかになったのは、以下のような点である。

- (1) 社会を捉えるうえで、ある特定の集合内における要素間の関係だけではなく、集合とその外部との境界設定自体に着目することが重要である。
- (2) ひとつの境界設定は、常にもうひとつの境界、第二の境界を創出する。それは、目立たない場合もあれば、積極的にそれが認識される場合もある（第二の境界の可視化）。
- (3) ふたつの境界の狭間に位置する両義的存在が他者性を帯びる。

これらの点は、社会学では、ほとんど論じられることがなかった。それは、すでに指摘した通り、社会学が境界内存在の集合を分析する学問として、知的分業体制のなかに組み込まれていったからである。社会学が想定している「社会」は、厳格な境界を持ち、その内部だけで自律している集合体であった。タルコット・パーソンズのような社会学者が、社会学以外の分野（特に自然科学の分野）から「システム」のような概念を導入してきたのは、社会の自律性を社会学が前提としてきた点を端的に示している。パーソンズが関心を抱いていたのは、社会システムがいかなる条件において安定するかという問題であり、これは、境界内集合にパーソンズの関心が集中している点を示している。パーソンズの理論は、相対的に政治的、経済的、社会的安定性のあった1950年代のアメリカ合衆国に暗にその根拠をおいていたと思われる。いいかえれば、一見抽象度の高いその理論を支える社会観は、アメリカという国家をモデルとしていたのである。

パーソンズに限らず、古典的な社会学者にとっての社会観は、共通の文化的背景を持った国民国家を前提として構成されている。その典型が、エミール・デュルケームである。デュルケームは、第三共和政における共和国の道徳はいかにあるべきかを追求し、社会学を通じた国民道徳を確立しようとした。デュルケームが強調していた社会の統合を支える規範の重要性は、まさにフランス共和国の国民道徳による統合の必要性を念頭においたものである。

デュルケームやパーソンズの理論の延長線上に、社会学は、社会秩序の形成過程を社会の成員がいかに統合されるかという問題として理解し、秩序を支えているのは規範であるという前提に立ってきた。そこには、社会秩序形成の契機となる他者や、他者を生み出す境界概念は存在しない。

しかし、問題は、境界内集合の「秩序」がいかに形成されるかではなく、境界の設定、移動のなかでいかに他者が立ち現われ、認識されるかである。境界設定や変更のなかで生じるコンフリクト⁸⁾と合意形成過程や、二重の境界が設定されるなかで⁹⁾、いかに他者が定義されるかといった問題こそ、問われなければならない問題なのである。境界内存在の集合のみを対象とした社会学から、他者概念をその中心に据える社会学へと、大きな転換を図ることこそ、21世紀社会学の課題である¹⁰⁾。

8) 境界の設定を確実なものにしようとする力と、これを変更しようとする力は常に存在しており、そこからコンフリクトが生じると考えられる。

9) 実査には、境界は無数に引かれており、二重の境界は、これをもっとも単純化したケースである。

10) 最後にもう一点付け加えておこう。今まで、論じてきたのは、あくまで社会的にある特定の空間に位置する存在が特権的に他者となる状況である。したがって、コミュニケーションにおける他者問題については、ふれていない。つまり、他者理解は可能か、絶対的他者＝理解不可能な他者がいるのではないかという問いである。このような問題についても、本論で展開しようとした理論枠組は有効であると考えている。

文献

- Armengaud, André, 1976, *La Population française au XIXe siècle*, P.U.F.
Dumont, Louis, 1977, *Homo aequalis*, Gallimard.
Durkheim, Emile, [1912] 1985, *Les Formes élémentaires de la vie religieuse*, P.U.F.
Namer, Gérard, 1994, "Postface", in Halbwichs, Maurice, *Les Cadres sociaux de la mémoire*, Albin Michel, 299-397.
Pourcher, Yves, 1994, *Les Jours de guerre*, Plon.
Said, Edward, 1978, *Orientalism*, Georges Borchardt Inc.
Simmel, Georg, 1908=1999, *Sociologie*, P.U.F.
荻野昌弘, 1998, 『資本主義と他者』関西学院大学出版会
荻野昌弘, 2005, 『零度の社会－詐欺と贈与の社会学』世界思想社

(原稿受付 2009年2月9日、掲載決定 2009年2月16日)

Abstract

Introduction to the Social Theory of Otherness

Masahiro Ogino
Kwansei Gakuin University

This paper shows that the practice of "living" is an action of setting boundaries and the perception of others is constituted in this process. The purpose of the paper is to present an idea of innovative social theory by putting the concept of others in the centre of the theoretical scheme.

Keywords

others, boundaries, ambivalence, war, colony

(Received February, 9, 2009, Accepted February, 16, 2009)